

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：82620

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770273

研究課題名(和文)肥沃な三日月地帯の東翼ザグロス地域における新石器化に関する考古学的研究

研究課題名(英文)An Archaeological Study on the Neolithization of the Zagros Region

研究代表者

安倍 雅史(Abe, Masashi)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・研究員

研究者番号：50583308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：西アジアの肥沃な三日月地帯は、地中海式農耕の起源地として知られている。1990年代には、肥沃な三日月地帯の中でも、西側のレヴァントで最初に農耕・牧畜が開始されたと考古学会では考えられていた。しかし、今世紀に入り急速に発達した遺伝子研究は、対照的に東側のザグロスでも独自に農耕・牧畜が誕生した可能性を示している。

筆者は、研究の空白地帯であったザグロス地域における農耕・牧畜の起源、またこの地域からの農耕・牧畜の拡散のプロセスを解明するため、イラン・ザグロス地域を対象に考古学調査を実施した。その結果、中央ザグロスで誕生した農耕文化がどのように東漸していったか、具体的な知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The Fertile Crescent in the Middle East is known as a center of origin for the domestication of animals and plants. In the 1990s, most archaeologists believed that the first domestication of plants and animals occurred in the Levant. However, recent genetic studies strongly suggest the importance of the Zagros in the Neolithization of the Middle East.

In order to reveal the details of the process of domestication of animals and plants and spread of the agriculture in the Zagros, this author studied archaeological materials excavated from several important Neolithic sites in Iranian Zagros.

研究分野：考古学

キーワード：西アジア 農耕・牧畜の起源 新石器化 ザグロス

1. 研究開始当初の背景

西アジアの「肥沃な三日月地帯」は、地中海式農耕(ムギ作農耕とヒツジ・ヤギ飼育)の起源地として知られている。

過去、30年間、肥沃な三日月地帯の西翼レヴァント地方(現在のトルコ、シリア、レバノン、パレスチナ、イスラエル、ヨルダンに相当する)では、新石器時代を対象とする考古学研究が飛躍的に進展を遂げた。

一方、東翼をなすザグロス地方(現在のイラク、イランに相当する)では、不安定な政局の影響を受け、考古学研究が著しく停滞してきた。

この結果、1990年代までには、農耕・牧畜はレヴァント地方に起源し、ザグロス地方が果たした役割は小さく、ザグロス地方には比較的新しい時期になってから農耕・牧畜の技術が西方から伝播したとする学説(レヴァント単一起源説)が考古学会で形成された。

しかし、対照的に、今世紀に入り急速に発展を遂げた遺伝子研究は、農耕・牧畜の起源地としてザグロス地方の重要性を指摘している。

2007年には、ユーラシア大陸各地の現生の野生・栽培大麦を対象に遺伝子研究が行われ、世界には大麦の系統が2系統あることが判明した。そして、ヨーロッパ、アフリカで栽培されている大麦は、レヴァント地方に自生している野生種を祖先とし、東アジア、中央アジアで栽培されている大麦は、ザグロス地方の野生種を祖先にしている可能性が指摘された。

また2008年には、同様にユーラシア大陸各地の現生の野生・家畜ヤギの遺伝子が研究されたが、世界で最初にヤギの家畜化が進行した地域は、レヴァント地方ではなくザグロス地方であった可能性が指摘された。

また、エンマー小麦に関しても、ザグロス地方とレヴァント地方の野生種が交配したものが、現生の栽培エンマー小麦の祖先であると、近年の遺伝子研究によって指摘されている。

このように今世紀になってから実施されるようになった遺伝子研究は、ザグロス地方でも独自にヤギの家畜化や、大麦、小麦の栽培化が進行した可能性があること、つまり農耕・牧畜が、レヴァント地方とは別にザグロス地域でも独自にはじまった可能性があること(多地域起源説)を支持している。

そのため、ザグロス地方の新石器時代を対象とした、本格的な考古学調査の実施が国際的に急務となっている。

さらに、2013年には、イラン・ドイツ隊が、中央ザグロスにあるチョガ・ゴラーン遺跡で重要な発見をしている。彼らは、この遺跡の発掘調査を行い、この遺跡における大麦、小麦、レンズ豆の栽培が、レヴァントと同様に前1万年にまで遡る可能性があることを指摘し、学会の注目を集めている。

考古学会でも、少しずつではあるが、多

地域起源説を支持する研究が増加しつつあるのが現状である。

2. 研究の目的

西アジアの「肥沃な三日月地帯」は、ムギ作農耕、ヒツジ・ヤギ飼育の起源地として知られているが、現在、この農耕・牧畜の起源に関して、考古学から提出された仮説と、遺伝子学から提出された仮説が真っ向から対立をしている。

考古学者の大半は、農耕・牧畜は西側のレヴァント地方のみで開始されたとする単一起源説を支持し、遺伝子学者の多くは、レヴァント地方と並行して東側のザグロス地方でも農耕・牧畜が開始されたとする多地域起源説を支持している。

本研究では、ザグロス地方に残されている初期農耕村落址を対象に考古学的調査を実施し、遺伝子研究から提出された多地域起源説を考古学的に検証していくことを最終的な目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、具体的には、イラン側のザグロス地方に残されている4つの初期農耕村落址から出土した考古資料の分析を実施した。

ラハマトバード遺跡とカッスル・エ・アハマド遺跡は、イラン南西部のファールス地方にある初期農耕村落址である。先土器新石器時代の層を持つ、ファールス地方で最も古い初期農耕村落址である。

この遺跡に関しては、2010年度、2011年度に実施した若手研究(B)「イラン、マルヴ・ダシュト盆地における新石器化の考古学的研究(代表者:安倍雅史)」において、研究を実施したが、本科研でも継続して研究を行い、その諸成果を論文にまとめ公表した。

本科研の研究の中心となったのが、イラン南東部ケルマーン州にあるガブコシ遺跡と、ファールス地方にあるホルマンガン遺跡である。

とくにガブコシ遺跡は、ザグロス型の農耕・牧畜文化の拡散を研究するうえで、非常に重要な遺跡である。

4. 研究成果

(1) ガブコシ遺跡に関する研究成果

ガブコシ遺跡は、イラン南東部ケルマーン州最古の農耕村落址である。この遺跡は、ザグロス山脈の最南東に位置する遺跡であり、ここから東側には、農耕には不向きな乾燥した巨大なルート沙漠が広がっている。

ケルマーン州では、先土器新石器時代の遺跡は知られておらず、土器新石器時代前半、前6500年～前6000年頃に年代付けられている、このガブコシ遺跡が、現在知られているなかで最も古い初期農耕村落址となっている。

ガブコシ遺跡からは、スサ入りの粗製土器が出土しているが、発掘者のナデル・ソリマ

二博士によって、この土器は、器形や製作方法において、西方のイラン南西部のファールス地方の土器新石器時代前半の土器にきわめて類似してことが明らかにされた。このことは、打製石器の分析からも支持される。

筆者は、ガブコシ遺跡から出土した打製石器の分析を実施したが、石器の製作技術や型式において、ガブコシ遺跡の打製石器は、ファールス地方の土器新石器時代前半の遺跡から出土するものときわめて類似していることが判明した。

このことから、ケルマーン州には、西方のファールス地方から、農耕文化が伝播したことが推測された。ファールス地方では、前7千年にまで遡る初期農耕村落址が確認されている。

現在、ザグロス地方で最も古い農耕の痕跡は、中央ザグロスで見つかっており、中央ザグロスでの農耕の開始は、前1万年までさかのぼることが知られている。

中央ザグロスで前1万年ごろに開始されたザグロス型の農耕文化は、前7千年ごろにファールス地方に伝播し、やがてファールス地方を經由して、前6500年～前6000年ごろに、ケルマーン州にまで達したことが推測された。

ガブコシ遺跡は、ザグロス山脈の最南東に立地している。これより東側には、農耕に不向きな広大なルート沙漠が広がっている。ガブコシ遺跡より、東側の地域の石器資料（タル・イ・アタシ遺跡やメヘルガル遺跡など）に目を向けると、ガブコシ遺跡のものとはまったく異なった石器伝統が広がっている。

おそらく、中央ザグロスで誕生したザグロス型の農耕文化は、同一環境が広がるザグロス山脈内には順調に拡散したと思われる。

一方で、この農耕文化は、乾燥し、農耕に不向きな広大なルート沙漠を超えることは難しかったと思われる。、ルート沙漠を超える際に、この農耕文化は、大きく変容していったものと推測された。

このように、ガブコシ遺跡出土の打製石器は、ザグロス型の農耕文化の拡散を考えると、非常に重要な資料である。

この研究成果に関しては、今後、2017年、2018年に、和文、英文にて学術論文として公表していく予定である。

(2) ホルマンガン遺跡に関する研究成果

ホルマンガン遺跡は、イラン南西部、ザグロス山脈南部ファールス地方にある土器新石器時代前半の初期農耕村落址である。

2016年より、テヘラン大学のモルテザ・ハニプール氏が中心となって発掘調査を進めている。

このホルマンガン遺跡に関しては、筆者が中心となり、放射性炭素年代測定と出土打製石器の分析を実施した。

ホルマンガン遺跡出土の炭化物8点の放射性炭素年代測定を実施した結果、この遺跡が、

前6200年から前6000年の時期に年代付けられることが判明した。

また、打製石器の分析を行った結果、前後の時代に比べて、狩猟具である幾何学形石器が著しく多いことが判明した。

前6200年から前6000年の時期は、8.2kaイベントと呼ばれる時期に相当し、気候が著しく寒冷・乾燥化したことが知られている。

おそらくこの寒冷・乾燥化の影響を受け、農業生産高は著しく減少したと思われるが、これを補うために、一時的に野生獣の狩猟の役割が高まったことが示唆された。

放射性炭素年代の結果と打製石器の分析の結果は、今年度中に学術論文としてまとめ公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

安倍雅史・ホセイン・アジジ＝ハラナギ (2016)「南西イラン・ファールス地方、土器新石器時代に起きた黒曜石製石器製作の変容に関する一考察 - カッスル・エ・アハマド遺跡出土資料の分析から - 」『西アジア考古学』17号 105-115頁 日本西アジア考古学会 査読有

Yoshihiro NISHIAKI・Hossein Azizi KHARANAGHI・Masashi ABE (2014)「The Late Aceramic Neolithic Flaked Stone Assemblage from Tepe Rahmatabad, Fars, Southwest Iran」『Iran』51 pp. 1-15 British Institute of Persian Studies 査読有

Masashi ABE・Hossein Azizi KHARANAGHI (2014)「A Study on the Early Pottery Neolithic Chipped Stone Assemblage from Rahmatabad」『Proceedings of the International Congress of Young Archaeologists』pp. 26-44 The University of Tehran Press 査読無

安倍雅史・三木健裕 (2014)「イラン、テヘラン大学で開催された若手考古学者国際会議に参加して」『西アジア考古学』15号 75-79頁 日本西アジア考古学会 査読無

〔学会発表〕(計3件)

安倍雅史「近年の発掘調査から見たイランにおける農耕・牧畜の起源」『第15回イラン考古学セミナー』2015年10月31日、イラン・イスラム共和国大使館(東京都港区)

Masashi ABE「Early Pottery Neolithic Assemblage from Qasr-e Ahamad in Fars, Southwest Iran」『International Congress of Young Archaeologists』2015年10月11日～14日 テヘラン大学 テヘラン(イラン)

安倍雅史「南西イラン土器新石器時代前半期から土器新石器時代後半期にかけての黒曜石製石器製作の変容 - カッスル・エ・アハマド遺跡の分析から」『日本西アジア考古学会第20回大会』2015年6月13日～14日 名古屋大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕(計1件)

野口 敦・安倍雅史(2015)『イスラームと文化財』 新泉社 297頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安倍 雅史 (ABE, Masashi)

東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・研究員

研究者番号：50583308

(4) 研究協力者

ホセイン・アジジ = ハラナギ (Hossein Aziz KHARANAGHI)

モルテザ・ハニプル (Morteza KHANIPOUR)